美術科の「やりくり」のたとえば

～「作品との対話」―多様な視点で物事を見つめ，その世界観を深める力―～

木村信一郎
鳥取大学附属中学校　美術科
E-mail: kimura_si2@tottori-u.ac.jp

KIMURA Shinichiro（Tottori University Junior High School）: **An example of "Managing for solving problems" in art education. Dialogue through works - Ability to look at things from various perspectives and deepen their views of the world-**

要旨 ―「想像力により人間関係を構築してゆく力」の養成をめざして，中学校第 3 学年の美術科教育での表現と鑑賞活動に，オルタナティヴ活動（物事を多角的な視点で見つめることに重点を置いた活動）の導入を試みた。題材として用いたのは自画像である。　画家たちの自画像を「なる」行為で鑑賞することで，それらを鑑賞して感じたことを相互に出し合い，他者の感じ方をとりいれることで，自己の鑑賞力の幅と深さを高めることを目指した。このような相互討論の課程の取り入れは，鑑賞力の向上に有効であった。本稿では，その授業実践例についての指導案，用いた資料などを合わせて紹介する。また，他学年での実践についても紹介する。

キーワード ― 自画像，オルタナティヴ，作品との対話

Abstract ― I have tried to introduce "alternative activities" which emphasize rearing of abilities to look at things multi-directionally to expression and appreciation activities in art education of the 3rd grade of junior high school to nurse "ability for constructing harmonious human relations with imaginative power". By appreciating the painter's self-portrait in the act of "become", The aim of the activity was to develop and enhance breadth and depth of appreciative power, by sharing their impressions obtained through watching those works. It was found that introduction of such discussion to a class of art was effective in improving appreciative power. In this article I will show a teaching plan of an example of practice of the class, together with reference materials used in the class. I will also introduce practices for the 1st and 2rd grades and appreciation activities for all the grades.

Key words ― Self-portrait, alternative, dialogue through works

Ⅰ．美術科の取り組みの概要

1. はじめに

「作品（作者：私・他者＝思い）との対話」

「作品との対話」。「対話」という表現は，"向かい合って話し合うこと。また，その話。" とあるように，互いに顔を見合わせ，声で会話する活動のようにとらえられることが多いであろう。ここで私があげる「対話」とは，アメリア・アレナス氏が提唱した"思考能力，対話能力の向上を目的に実践される対話による美術作品の鑑賞法"（＝対話型鑑賞）を示している。たとえば，鑑賞活動であれば，級友，先輩，後輩の作品に対して，直接的であったり，間接的であったり，方法は様々であるが，自分が感じ取った作品への思いを送る活動は，作品を介した 他者との対話 といえよう。教科書や直接出会えない作家たちの作品について考える活動も 作品（＝他者の思い）との対話 と考えることができる。また，制作（表現活動）も「対話」と捉えて授業展開を行っている。例えば，これから描こうとする白い紙，形を作ろうとする素材がなるべく姿，色はなんだろう形はどうだろうと自分自身に投げかける表現活動は，作品を介して自分自身の思いを探る 私との対話 と考えることができる。

「多様な視点で物事を見つめ，その世界観を深める力」

国際化，少子高齢化等，様々な変化が進む我が国において，生徒たちを取り巻く未来は予測不可能な世界となると考えられる。近年，内閣府が

打ち出す Society5.0 時代には①「読解力，情報活用能力」②「教科教育の学びを自分の頭で働かせて表現する力」③「対話・協働を通じて知識・アイディアを共有し新しい解や納得解を産み出す力」が必要と言われている。そういった状況の中において，異文化コミュニケーションや世代間コミュニケーションといった多様なコミュニケーション能力は社会人として強く求められる時代となるだろう。そのような世界を担う生徒たちに対し，コミュニケーション能力として「想像力により，人間関係を構築していく力」「人と人をつなぐための能力」が，今後必要であると強く考えるようになった。そこで，先に述べた能力を育てるための美術教育の在り方や方法を，表現と鑑賞の活動を通して広く探求することを目的として本テーマを設定した。

2. 研究の視点

「物事を決まった一方向からではなく，多角的な視点で見つめること」

具体的に「想像力により，人間関係を構築していく力」「人と人をつなぐための能力」を育成するためには何が必要なのか。人は，それぞれ立場や価値観によって物の見方が異なる。物の見方が人によって異なっていることを理解し，「他の人の価値観を理解すること」とともに，「自分の価値観を他の人に理解してもらうこと」が人間関係を構築していくための第一段階である。そのためには「物事を決まった一方向からではなく，多角的な視点で見つめること」を重点においた活動（＝『オルタナティヴ（もう 1 つ別の）活動』と定義する）が重要と考えた。たとえば，表現においては，発想や構想したことを材料や用具を使って実際に表現する中で，他者の表現や，意見を取り入れることにより，よりよいものに高められることがある。創造的な技能においても，発想や構想をしたことが具体的な形として現れ，表現を追求していく中で，技能が高まったり新たな技能を発揮していく。鑑賞においては，他者の考えなども聞きながら，自分になかった視点や考え方を発見し，それらを取り入れながら，自分の目と心でしっかりと作品をとらえて見ることにより，自分の中に新しい価値がつくりだされていくことになる。ただ，作品とは，それぞれ制作された時代背景やその時の作者が置かれている状況，性格などが複雑に絡まって生み出されたものである。「多様な視点で物事を見つめ，その世界観を深める力」が身に着いていく授業展開を考える中で，ある程度の知識をやりくりしながら，作品の世界観を深める展開も 1 つであり，そういった要因を控えて作品自体から伝わる魅力を味わう展開も 1 つである。そういった作品要因をどうおさえるかという点もその授業ごとに考えながら実践を重ねてきた。授業では，ペアや小グループ，クラス全体など形態を変えながら，表現と鑑賞の活動の中で生徒それぞれが別の視点で考え，共有し高め合う「オルタナティヴ活動」を授業で実践しながら研究を重ねてきた。

「鑑賞と表現の流れを一体化した短時間教材の開発」

美術科には，表現と鑑賞の二領域があり，学習指導要領においては，〔共通事項〕を置くように，表現と鑑賞の一体化も定められている。鑑賞には，自他の作品などについて考えや思いを深く追求する活動があるが，それには，「個でじっくりと味わい，考えること」のみならず，「他者と考えや思いを共有し，高めること」が美術教育には求められていると考える。表現も同様のことが言え，自己の満足で終わるものではなく，作品への思いを他者に伝え，共有し，自己の心理を深く見つめ，その世界を表現しようと追求することが必要であると考える。つまり，鑑賞と表現はどちらも同じく，自分と他者との関係の中で高められるものであると言える。しかし，授業数の減少，表現活動の時間の確保などによって，現状としては，表現と鑑賞が分断化され，鑑賞が単一単元で扱われることが多い。そこで，授業としては，鑑賞と表現の流れを一体化した短時間教材の開発，実施をしている。これまで身に付けた知識，技能を駆使し，また，自己発信，他者理解を繰り返しながら，一方的な見方に捕らわれず，新たな見方を生徒同士が共有しながら「やりくり」の力を身に付けさせたいと考える。そのためには，ただ知識や技能を教え込んで与えるのではなく，その原理や意味を考えさせ，理解させる必要がある。

Ⅱ．作品との対話（授業）

1. 題材名

「作品との対話　～みる・なる・しる～」

2. 授業構成

2.1. 教師と教材

本題材は，学習指導要領の以下の点を主とする学習である。

B鑑賞（1）－ア―(ア) 感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現に関する鑑賞

観光地などに設置されている顔の部分をくりぬいた観光看板。それらは，その地の素晴らしさが凝縮されて描かれており，そこに自分を登場させて思い出として写真に残す時に，人は日常とは異なった特別な気持ち，表情をあらわすだろう。その看板の形態を踏まえ，名画などになりきり，セルフポートレートで数々の作品を発表し続けている現代アーティスト森村　泰昌氏の表現手法も重ねながら，新しい教材を考え，本授業において扱っている。

教科書や資料集にある自画像を「みる」鑑賞の授業とは異なり，作品側に「なる」という過程は今までになく生徒には新鮮な活動と思われる。造形的なよさや美しさに気づき，作者の心情や意図について「なる」活動で表現するなかで，同じ過程でも異なった視点のまわりの考えを共有しながら，多面的な視点で物事を見つめ作品への世界観を深めたい。

2.2. 子どもと教師

3 年生は，現在自画像に取り組んでいる。自分や興味のあるものをコラージュしながら，点描画で表現する題材である。学習過程も中盤を越え，表情や気持ちを表す模様などを考える過程をより深めようと本時の「なる」過程を設定している。教科書や資料集にある自画像について「みる」過程を踏まえて，作品のフレームを通して，特別な気持ちで感情を表そう「なる」過程の中で，想像力を働かせながら，自分の思いを表情と言葉で伝え，同じフレームから，別の思いをみいだした友達の考えを受け止めながら，共有し，自他の作品に対する思いを高めたい。

2.3. 子どもと教材

これまで，作品を鑑賞するというと何が描かれている，こんな色を使っているなど表面的に読みとれることや，作者の生い立ちや，時代背景などを学び（これらの学習過程を「みる」と位置付ける），そのうえで，作者の思いや作品の持つ素晴らしさを感じたり，時にはまわりと高め合う（これを「しる」と位置付ける）学習を行ってきた。本授業では，「みる」過程をしたうえで，感じたことを文字や言葉にあらわす前に，描かれた人物の表情をくりぬいた部分から作品と同化し，感じ取ったことを表情であらわすこと（「なる」過程）で，作品の内側に立ち，思いを伝えながら写真を撮ったり，まわりのアドバイスをもらい撮ってもらうなどの過程を通して，作品への思いをより深く高める「しる」過程を体感させたいと考える。

3. 本時について

3.1. 本時の目標

・作品に「なる」活動を通して，作者の心情や意図と創造的な表現の工夫などを感じ取り，自画像について言葉や写真で伝えることができる。【鑑賞の能力】

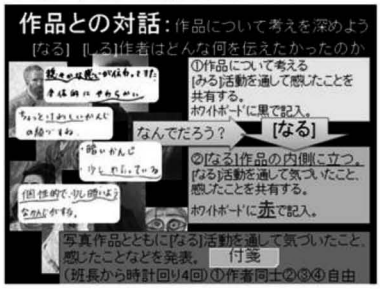
3.2. 学習計画（全 2 時間）

第 1 次：作品との対話「みる」
さまざまな自画像の作品背景について触れ，「なる」自画像を選ぶ
第 2 次：作品との対話「なる」「しる」

3.3. 期待される生徒の様相

A：作品に「なる」過程を理解し，作品に対する自分の考えを持って取り組み，まわりの意見を受け止めながら，自画像について考え，写真と言葉で表現することができる。
B：作品に「なる」過程を理解し，作品に対する自分の考えを持って取り組み，写真と言葉で表現することができる。
C：作品「なる」過程を理解し，写真と言葉で表現することができる。

3.4. 学習の展開

学習活動	○主な発問 ・予想される生徒の反応	・留意点○評価［観点］ （方法）※手立て	時間
1. 学習のめあての把握をする。（5分）	○どうしてこのような表現をしているのだろう。 ・作品になって作者の気持ちを考える。 ・作品の良さを味わう。 	・パワーポイントで森村泰昌の作品を表示し、制作過程を理解させ、準備させる。 ・反応が出なくても今日の活動の中で感じ取るよう示唆する。	5/5
2. 作品に［なる］活動（15分）	「なる」活動を通して作品について深く考えよう ○作者は作品を通して何を伝えたかったのか。 ・人間関係がうまくいかないつらく沈んだ気持ち。 ・自分を見てほしかった。・見るものに勇気を与えたい。 ・晩年まで作品を描き続けれた喜び。 	・生活班を用い、［みる］活動から感じた意見を共有し、［なる］活動を進める。 	15/20
3. 各班の［なる］作品を通して［しる］（25分）	○作品の表情（しぐさ）はどんな感情を表しているのか。 ・こちらにむけた強い目線を意識して演じた：作者の当時の強い思いを感じた。 ・口の表情を意識した：最後に満足して笑っていると感じた。固い決意を感じた。 ○自画像を描くとはどんな意味があるのだろう。 ・描くことを通して自分自身と向き合う ・その時の自分の姿と心を感じたままに表現	・同じ作者同士の班で作品発表。または全班同時のポスターセッションを行う。 ○作品になる活動を通して、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫などを感じ取り、自画像について言葉や写真で伝えることができる。［鑑賞の能力］（観察、ワークシート） ※他の意見や取り組み方を観察しながら共有させる。 	25/45
4. 本時のまとめをする。（5分）	○本時の振り返りをしよう。 ・作者の気持ちになって考えたことを作品に生かしていきたい。 ・この体験をまた別の作品でやってみたい。 	・教師の自画像を掲示しながら表現に探究心を持って深く取り組むように示唆する。	5/50

3.5 指導の実際と本題材の分析

生徒	「みる」実施時振り返り	「なる」活動写真	「なる」実施時振り返り	自画像とは
A	ちょっと険しい感じの顔ですね。		最初は悲しんでいるのかなと思ったけど、目線を表現すると気持ちが[無]になったので悲しいを越えた気持ちだったのかなと思いました。たくさん「なる」中で自然と雰囲気が全く違った表情ができました。	言葉では言い表せない気持ちを表現できるのかなと思いました。自分の思いを伝える一つの方法なのかなとも感じました。
B	・悲しそう ・背景もあり、何か考えている ・混乱している ・けわしい		同じような表情や気持ちでするのは少し難しいと思いました。1年生のときはモナリザだったけど今回は人物だったので少しやり易かった。	今の自分をよく知り、見つめるようなもの。ゴッホの場合、自分の気持ちを少し切り替える意味があるのかなと思いました。
D	そっくりに描くだけじゃなく、自分の強調したい部分を工夫して表現していることがわかった。		作者の気持ちがわかっていてもそれを表情に出すのは工夫がいると思いました。自画像は自分の内面を描いていると思いました。	表面（見た目）では分からない自分の内側の美しさや闇を表現するもの。年や状況によって違う自分が描ける。
E	暗いし、よく見えないし、なんでこんな自画像を描くんだろうと思いました。		「なる」ことで目線や表情を再現する中で、作者の表現したいことや感情を読みとることができたように思います。	いろんなパネルで表情を作る中で、それぞれの思いを想像しながら撮ったので、やっぱりその時の気持ちが一番表れるのが自画像かなと思いました。
F	様々な困難がどの画家にもあったと知った。いろんな技法を使って、感情を表現していた。		まっすぐと前を見つめるのが難しかったです。ディエゴを愛する気持ちが「なる」活動によって改めて分かりました。自画像に興味を持つきっかけとなりました。	自分の姿を改めて見つめ直し、今の自分の気持ちやこれからどういう自分にしていくのか考えることができるもの。
G	真顔の表情なので悲しいのかなと思います。		顔の向きと目線を表現するなかで、彼女の気持ちの強さを感じました。「なる」をやるのは4回目だったけど、やはり良さは人物の気持ちになれることは楽しいと思いました。	その人の人生を写す鏡のようなもの。自分でしか表現できないものが一番詰まっている。また、描くことでその時を振り返れる。
H	特徴ある描き方が面白いと感じた。画風が個性的です。		「なる」ことで色や表情、明暗などを表情で再現しようとする中で、作者は自分の気持ちを伝えたかったんだなと思った。なり切れたかわからないが、人に説明することで自分の中で深まり、伝えることが出来たと思う。	自分の思いを表現できそれを観る側に伝えることが出来るもの。描き終わった後には作者自身がいろんなことに気づかされるようなもの。
I	自画像にはそれぞれの思いや人生を詰め込まれていると感じた。ﾋﾟｶｿの自画像は意外とかっこいいなと思いました。		実際の作品と同じ視線を再現する中で、当時のﾋﾟｶｿの心情を想像することができた。「絵が上手すぎてつまらない」「目標が見つからない」「モチベーションがない」など。	その時々の気持ちを表現してみる側に伝えたり、自身もそれをみて振り返れるもの。実際に言えないようなことも表すことができる。

図 3.5-1 「みる」「なる」活動の振り返り

本題材は，第 3 学年の 4 学級 132 名の生徒を対象とし，2019 年 6 月下旬から 7 月上旬に行った。授業では自画像 8 点を使用した（**図 3.5-2**）。いずれも本校美術科において使用している教科書，美術資料に掲載されている作品から同一作家の制作時代の比較，多岐に渡る作風等を考慮して選んでいる。

上記**図 3.5-1** は授業時に使用したワークシートより抜粋した「なる」活動で表現した写真及び,「みる」,「なる」活動の振り返りである。

図 3.5-2 使用した自画像 8 点

ﾌｨﾝｾﾝﾄ・ﾌｧﾝ・ｺﾞｯﾎ①「画家としての自画像」1888 ／②「渦巻く青い背景の中の自画像」1889 ﾚﾝﾌﾞﾗﾝﾄ・ﾌｧﾝ・ﾚｲﾝ③「自画像」1628 ／④「ｾﾞｳｸｼスとしての自画像」1669 ﾌﾘｰﾀﾞ・ｶｰﾛ⑤「猿をつれた自画像」1938 ／⑥「ﾃﾜﾅ衣装の自画像」1945 ﾊﾟﾌﾞﾛ・ﾋﾟｶｿ⑦「自画像」1896 ／⑧「自画像」1972

図 3.5-3 は授業後の振り返りとその内容を分析したものである。

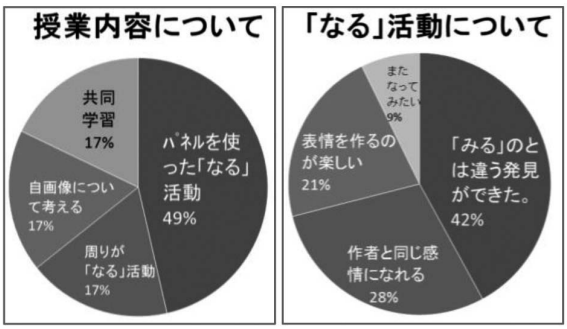


図 3.5-3 授業の振り返り（対象生徒 4 学級 132 名）

授業内容については，自分及び周りが自画像に「なる」活動，共同学習（オルタナティヴ活動），及び自画像について考える活動について面白さを感じる生徒の様子が見られた。また，（自身及び周りが）「なる」活動について，生徒の言葉を分析すると，「みる」活動とは違う発見ができたと述べる生徒が多かった。次いで作者と同じ感情になれる，表情を作る活動に楽しみを見出すなど，「なる」鑑賞活動を好意的に取り組んでいる様子が伺える。**図 3.5-1** において，生徒A，E，Gは「みる」活動で作品から読み取った人物の視線や表現の仕方を個々の表情で再現する中で，その表現の意味を自分なりに解釈しながら，作者の心情を自然と読み取っている様子が伺える。

また，**図 3.5-4** が示すように，「みる」活動では，「伝えたかった」と読み取っていた感情が，「なる」活動を経て「何も考えたくない」と異なる心情に辿り着くグループもあった。

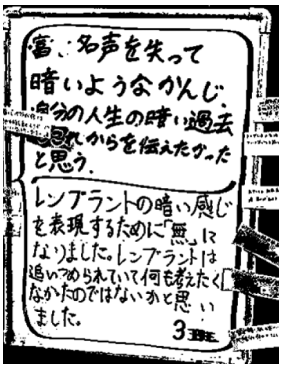


図 3.5-4 各班で使用したホワイトボード

図 3.5-4 は，8 点の自画像にそれぞれ「なる」活動を他のグループ，クラスメイトに活動を紹介する共同学習時に使用している。活動時にはグループの一人の説明を聞き，そこから感じたことや，新たに生まれた考えやアイディアを付箋に言葉で残したり，またはそのグループが使用したパネルを用いて「なる」活動で表現する姿もあった。**図 3.5-1** において生徒A，G，Hの生徒の言葉には，共同学習から，考えを深めたり，より多くの「なる」活動を楽しむ様子が伺える。

2016 年度に本題材を実施した際，“こうした生徒の言葉は，「なる」活動なしでもある程度の知識があれば到達できるのでは”という課題があったが，今回共同活動の中でさらに「なる」活動を設ける中で，新たな思考や表現を見出す姿があったのは大きな成果であったと考える。また，右の**図 3.5-5** はフィンセント・ファン・ゴッホの自画像になったものである。初めは作品を再現しようと目線や顔の角度にこだわって「なる」活動を行っていたが，生徒が想像した作者の心情を表現するために，あえて口を隠し，怒りと悲しみを表現する生徒がいた。共同学習時には，この表現に共感を持ち，その撮り方を真似したり，別の「なる」活動を行う生徒も多くいた。こうした「なる」活動から，その作品の良さを伝え，味わう鑑賞活動だけに留まらず，「なる」活動を表現活動として自然と捉え，追求する姿は，授業者としては想定していなかったが，今後題材の発展を考える際に，作品の内面を追求した生徒の姿を想定して展開する必要性を感じることができた。

図 3.5-5 「なる」活動写真

Ⅲ．他学年の実践例

3.1 題材と対象学年，実施期間

題材名：「作品との対話～みる・なる・しる ～」
対象学年：全学年
実施期間：4 月～ 6 月に 1 ～ 3 時間

3.2 内容と今後の展望

年度当初にあたる時期に全学年で行っている。「作品との対話 - 多様な視点で物事を見つめ，その世界観を深める力 -」＝「生徒の学びの充実」＋「限られた時間数」＝鑑賞と表現の流れを一体化した短時間教材の開発を踏まえて，各学年の成長過程，学習目標に応じて鑑賞対象を設定している。授業内容は共通して，まず既成の名画を鑑賞（「みる」）し，そのうえで作品の登場人物の心情を考え，表情，動きを演じ（「なる」）写真作品を制作，その制作活動を通して，個人，集団（班・学級）で深く学ぶ（「しる」）という流れである。1 年生では美術作品との出会いを目標にレオナルド・ダ・ヴィンチ作「モナ・リザ」を扱っている。1 年生は成長過程を考え，この鑑賞活動の導入として実施したが，**図 3.2-1** が示すように生徒の中には「モナ・リザ」の未解明な人物像を想像する中で，目線や微笑みの再現ではなく，人物像に強い意志があることを感じ，目線を上に向け，意志の強さを口を強く閉じることで表現する生徒も見られた。

図 3.2-1

2 年生では，顔と手の表情とその表現のよさを学ぶことを目標に同じくレオナルド・ダ・ヴィンチ作「最後の晩餐」を扱っている。

それぞれが演じる人物像を個々で設定しながら，身ぶり手ぶり，表情を作り表現しようとする姿が見られた。また衣装や小道具を自主的に準備する姿も多く見られた。

今年度 3 年生では，研究対象の題材に加え，春先の学年行事（東京修学旅行）にて，フィンセント・ファン・ゴッホ作「ひまわり」（1888）の実物を鑑賞したこともあり，「ひまわり」に「なる」鑑賞活動を実施している。授業は 3 時間で，修学旅行に行く前に 1 時間「みる」鑑賞活動を行い，“作者がひまわりに込めた思いとは？”という問いかけに対して，人間ではない植物である「ひまわり」に感情を見出しながら，誰がどのひまわりを演じるかなど，「なる」活動の準備を行った。修学旅行後，実際に「ひまわり」を鑑賞した生徒の感想を交えながら，2，3 時間で「なる」活動を実施している。

鑑賞の一環としてより深く作品を味わう活動として実施した「なる」活動は，演じる側，撮影する側の相互関係が必要であり，年度当初の仲間作りにもつながると考える。また，写真（2 年生「最後の晩餐」，3 年生「ひまわり」はコラージュの要

素も必要）は短時間で制作できる作品となる。掲示等も早い段階で可能であり，生徒の学びの意欲にもつながると考えている。また，3 年間を通じて行っていることと，先輩の表現を見る中で，学年が上がるたびにその表現に生徒は工夫を凝らしていく様子も伺える。ただ，「なる」活動のおもしろさ，楽しさが先行しすぎて，作品への思いがあまり深まらないのでは，といった懸念もある。本題材については，さらなる「みる」「しる」といった制作背景，作者の心情をより深く考察し，共有する活動を充実させるなど，授業展開のよりよい改善も必要と考えている。

Ⅳ．今後の取り組み

これまで，鑑賞と表現の流れを一体化した短時間教材の開発に年間を通じて取り組み，各成長段階に応じた学びの充実に努めてきた。現在取り組んでいる「なる」鑑賞活動は，作品の内側に立ち，その作品を深く味わう活動であるが，先に述べたように，生徒の多くは，ただ単に現存する作品を再現するのではなく，その作品に込められた作者の思いを考え，そこに自分なりの解釈で物語を見出し，鑑賞から表現へと発展させる姿が見られた。また，研究対象の題材において，生徒の言葉に，“4 回目の「なる」活動だからこそ，より深く作品と向き合えた”とあったように，学年なりの成長段階に応じて実施しているからこそ，鑑賞に留まらない生徒の学びが表れたと考えている。

作品が優先されがちな美術教育の現状において鑑賞の過程からの表現，鑑賞を踏まえての表現

といったように鑑賞を含めた学びの跡に作品が残る実践を今後も取り組んでいきたいと考える。

文献

永田佳之（2005）オルタナティヴ教育．－国際比較に見る 21 世紀の学校つくり．新評論（東京），368pp.

文部科学省（2017）中学校学習指導要領解説美術編．文部科学省，6pp － 140pp.

上野行一（2001）まなざしの共有―アメリア・アレナスの鑑賞教育に学ぶ．淡交社（東京）

鈴木有紀（2019）教えない授業 美術館発，「正解のない問い」に挑む力の育て方．英治出版（東京）

鳥取大学附属中学校（2016）自立し，つながり，探究し，創造する力の育成やりくりのたとえば